

8回目の福島紀行

一避難指示解除の意味は??一

2019年4月1日～4月3日

狛江の放射能を測る会 二階堂 まり

震災から9年目に入った福島。「避難指示解除」されるところが次々と出てきて、「普通の」新聞やニュースでしか情報を受け取らない人たちは、「よかったね」と思ってしまう今日この頃。私たち3人は、生の現場で「違う」面を見たくて知りたくて、そしてそれを伝えたくて8回目の福島に向かった。去年との見た目での違いとして一番感じたのは更地が多くなったこと、「復興住宅」などの新しい建物が増えたこと、一部のフレコンバッグが撤去されたことだ。それでは、復興は順調に進んでいるのか?とてもそうは思えない。私には「変な」形で町や村が変わって行っているように見えた。そして役場を含む色々な方のお話を聴いて更にそう思った。「避難指示解除」って、「復興」って何だろうか?

<いわき市民訴訟原告団長の伊東達也さん宅でのお話>

○避難者数

政府の発表(2019. 2.7 現在)だと避難者数を4万1,954人(県内9,323人、県外3万2,631人)としているが、これは仮設住宅・民間借り上げ住宅・親戚知人宅に避難している人だけを「避難者」としているし、更に5市町村の20～30キロ圏内の旧緊急時避難準備区域(避難の準備してればよかったのに勝手に避難した!)の住民と避難指示区域外から避難した人(自主避難者)なども避難者と認めていない。

視点を変えて、「元の住宅に戻っていない人数」を考えてみる。福島県発表の「避難指示区域等の居住状況」によれば、2011.3を基準にすると99,676人が元の住宅に戻っておらず、自主避難(当時1万2千所帯)で戻っていない人を加えると10～11万人と推定される。

○地域社会は帰還宣言が出てからもともに機能はしていない

2018年4月に開校した小中学校への通学者数は2019/2現在で、浪江7人(0.4%)、富岡17人(1.1%)、飯舘75人(14%)、川俣町山木屋地区15人(15%)。山木屋小は1年で休校(事実上の廃校)、他はどこでも保育園から中学校までを一カ所で開校。避難指示区域内の5つの県立高校は休校となっている。(都路地区では2014年に再開した一校が三年で廃校になり古道小と合併して都路小になった。)

帰還者は高齢者が圧倒的に多く、青年、特に子どもは極端に少ない。作業員の宿泊施設やそのための商業施設の増設はあっても、地域住民の居住が回復しないので住宅地は荒廃、医療施設も少な



いわき市民訴訟原告団長の伊東達也さん。自宅書斎で話を聴く。被災者・被災地の現状と対策について、熱く語る。

く商店街も閉鎖のままと地域社会は機能していない。

除染は自宅周辺 20m が原則で将来のことや被ばくへの不安を強いられている。

固定資産税は今年から 50%、年ごとに 75%→100% と上がることや、国による解体費用が今年 3 月で打ち切られることもあったため、家屋の解体が進んでいる。

自主避難者への無償住宅支援は 2017/3、営業損害賠償は 2017/7、精神的賠償は 2018/3 に原則打ち切り。東電は ADR (裁判に訴えず被害者との間に中立的な第 3 者が入って解決する) 和解案も拒否し続け、浪江町 15,700 人、福島市渡利地区 3,107 人、飯舘村 3,070 人の和解手続きが打ち切り。直接請求の支払いを拒否。

避難生活が長引き、先の展望がない中、震災関連死 2,271 人（直接死 1,605 人）が出ている。孤独死約 70 人、自殺 103 人！

○除染土壌の中間貯蔵施設

2014 年 12 月に大熊町、2015 年 1 月に双葉町が苦渋の受け入れを表明して、2017 年 10 月から、フレコンバッグ最大 2200 万袋（東京ドーム 18 杯分）を県内の各市町村から運び始めた。政府は「貯蔵から 30 年以内（2045 年 3 月まで）に福島県外で最終処分を行う」といい、「国が責任を持って対応する」と言っているが、全く具体的な話はない。減らすための再利用（道路の路盤使用）計画も、受け入れを表明した地域での白紙撤回や反対運動が起きている。一生懸命やっているが難しいというならまだわかるが、本気度が全く見えない。

大熊町・双葉町の中間貯蔵施設は狛江市の 2.5 倍の大きさになる予定（現取得面積は約 2 倍）で、フレコンバックが一日に何千トンと送られてくる。6 つのピラミッドのトップに別々のゼネコンがいて管理し、一大儲け事業。一日に三百何台ものトラックが県内を移動するので、休むところなどで住民とトラブルを起こさないように、管理センターでトラックの位置を地図上で管理している。施設を作るために埋め立てたところは家を潰したが、周りには民家がいっぱい残っている。施設はガラス張りでコンベアーなどが見える。1 日に 20 人見学できる。

福島県内の除染で出た汚染土の内、国は 8000 ベクレル以下を道路の盛り土などに再生利用としている。しかし、二本松市は事実上の白紙撤回で、南相馬市は受け入れてしまったが小高地区 10 人の区長が反対をしている。（長泥は「除染面積を広げる」という交換条件で、「苦渋の選択」（区長）で受け入れたと NHK で放映。花を植える土地にするとか）。問題山積み。「安全」なら再利用で使うのは東京でやれば！？と。

○子どもの甲状腺がん検査

避難指示が解除された区域での小中学校の通学者数（2019 年 2 月 1 日）

市町村名	2010 年度	2018 年度
田村市（都路地区）	228 人	110 人（48.2%）
南相馬市（小高地区）	1,087 人	126 人（11.6%）
川俣町（山木屋地区）	99 人	15 人（15.2%）
広野町	541 人	219 人（40.5%）
楢葉町	686 人	107 人（15.6%）
富岡町	1,487 人	23 人（1.5%）
川内村	166 人	65 人（39.2%）
浪江町	1,773 人	7 人（0.4%）
葛尾村	112 人	18 人（16.1%）
飯舘村	531 人	79 人（14.9%）
合計	6,710 人	769 人（11.5%）

* 2018 年 3 月 9 日付 東京新聞（各教育委員会への取材による）

* 大熊町と双葉町は避難指示が解除されていない

3巡目の検査までに癌の確定者166人、疑い38人（計204人）。「検診を受けると死亡を引き起こさない癌を診断する可能性があるという不利益がある」という発言が出たり、また、わざわざ指定病院を決めていることもあって、受けるか受けないかが微妙な雰囲気の中にある。遺伝するとは証明されていないが、原告でも「被曝」と言いにくく、言及する人がいない。大切なことは、原因論争などに終わらせず、継続的な検診や医療体制の充実を求めることだ。

○損害賠償の集団訴訟は30件

これまで地裁での判決が10件出ている。国を被告にしている8件の内、千葉地裁が扱ったものを除く6件で国の責任を認めている。千葉では第一陣で国の無罪判決、二陣はその「お友だち」判決で無罪。東電の責任は10件すべてで認めている。

○廃炉資料館

富岡町の元「東電エネルギー館」が「廃炉資料館」としてオープンし、反省しているかのような巧妙な展示と説明が行われているが、加害責任は認めず、被災者・被災地問題には触れておらず、事故を起こした企業としての誠意は見えない。

<いわき市民放射能測定室「たらちね」でのお話>

○海水浴場の土壌調査

いわき市の今年の海開きは、去年の3海岸+波立（はったち）海岸。行政は、空間線量+波打ち際の水に浸かっているところの砂だけを測って放射能不検出としているが、たらちねでは各海岸で数カ所を測っている。海の家前の砂浜は結構高い。GWに砂掘り隊が線量を測るための砂を取りに行ったが、ビキニのお姉ちゃんたちの脇で完全防備でマスクのメンバーが掘っているのはちょっと（苦笑）・・・

市内で1万ベクレルを超える土壌がいまもある。山では北部ではなくても放射線量が高い。

○β線測定器の増設

もう一台購入してフル回転。ストロンチウムだけでなく海水中のトリチウムも測って、今後と比較できるようにしている。

○たらちねクリニック

この1年での新しい患者は千人くらい。去年は検診が多かったが最近は普通の（インフルエンザとか）患者が多い。

復興住宅に月一回出張検診に行く。老人に放射能の検診の意味はあまりないが、コミュニティを大切にすると



伊東さんは自宅敷地に希望の杜福祉会「けやき共同作業所」を経営している。その玄関前で。



昨年、ベータ線測定器をもう一台買いたいと聞いていたが、すでに導入され、稼働していた。2台がフル稼働状態。必要なことは何でもやる！それを実行するすげー！



子どものためのセラピー室。保養施設沖縄の球美の里の経験からたらちねの部屋を拡張して採り入れた。身体と心をいやす。親も受け入れている。

いう意味で大事。

沖縄での保養プログラムで一番良かったと子どもたちに人気だったリラクゼーションプログラムは子どもと母親の心身をフォローするために大切。色・香りなど癒しの部屋でマッサージを受けられる。食の心配などの相談ができて色々話せる場があることが一番。子どもは母親が元気で安定しているのが一番。

☆先生を含めてスタッフ、雰囲気がとても優しく温かく、母子が心を休められるだろうと思う。

<ザ・ピープル>

こちらも、ず〜っと復興の中心にあって、次々と明るく挑戦していくパワーにいつも脱帽！「いのち」の息吹と手探りの工夫を感じるプレハブのボランティアセンターでお話を聴く。

○フードバンク

小名浜でやっていたものをモデルにいわき市全地域に拡大。支援金が打ち切られて生活が困窮している避難者に「すぐに」食べ物を供給できるようにと去年立ち上げたが、秋頃まで動きがほとんどなかった。必要な人に直接接触するのではなく市の相談窓口を通すことをスタンスとしてきたのだが、情報が上の人から実際の窓口の人まで下りてきていなかった。10月に、双葉町からいわき市の借り上げにいる人に提供してほしいという申し入れがあり、それを皮切りに、借り上げ住宅や公営住宅などで少しずつ利用され始めた。月に数件ではあるが。100、200とニーズがあるはずだが、やはり行政が動かないと・・・

○生活就労支援センター

ピープルの活動の一部として「避難してきた人たちの自治を助ける役割」を4年間やってきた。自治会で運営できるまでには色々な問題があり（地域の自治会に加入するしないなど）あと2年続ける。自立しようとする人が面接に行きたいが服がないというケースに服を提供したりもしている。ピープルは元々古着のリサイクルをやっていたのでお手の物！

公営住宅：高齢者が多いのでだんだん空きが出てくる。今後、この空きはどうなるのか？

○コットンサミット

もともとは西日本を中心に開催されてきた。東北ではコットンの産地は会津くらいだ。しかし復興の産業としてピープルが始めたオーガニックコットン栽培がだんだん広がってきて、第7回コットンサミットが2018.10.7にいわき市で開催された。「地球環境基金」の範囲でやるのは無理とわかり、別に実行委員会を立ち上げた。県からの助成金や企業からの寄付を募って、サミット前後の10.1～8にいわき市全域で「コットンウィーク」を開催。九州などを含めて市外から200人以上参加。一週間かけてコットン産業の実態や情報を交換。首都からバスツアーもあり、会津→いわき→南相馬のルートで、6号線を通って浜通り・原発立地の現地を見て知ってもらい、広野・富岡でコ



右端が今回案内して頂いた飯田亜由美さん。このスタッフは皆さん明るく親切で、来るたびに感心しています。



ザ・ピープルの吉田恵美子さん。コットン栽培が支援活動から事業活動へ転換できるか、販売店の確保、糸・織り、染などの製造等、奮闘している。

otton栽培をしている人たちと交流、南相馬では藍染の人たちの声も聴いた。農家合宿をしていわきで作ったコットン製品を南相馬で染めるというコットンベルトがコットンサミットを契機にできてきている。

日本オーガニック協会の会長も来訪し高く評価。NHK 国際放送で直前にコットンプロジェクトのことを15カ国語で放送したのを受け、「国際的」は大切だから自分たちも何かやろうと新しい企画を考えた。東京の留学生を招いてバスツアーをやり彼らの母国語で広めてもらうプロジェクトを2019年に計画。

オーガニックコットンを産業にするための2つの方策

① 販売：スポーツ店パタゴニアの社長が、経費を上げられる企業体にしたいとこの4月に起業。店ごとにオーガニックコットンを使った製品を作る。手拭を扱っている。コットンプロジェクトは元々は「おてんとSUNプロジェクト」としてNPOで始めた事業だが、彼は早い時期から見に来ていて、パタゴニアは栽培の手伝いもしている。

② 栽培：四ツ倉の上柳生に住む福島さんが農機具置き場の古い小屋を、住友商事の助成で改装し、段々畑でコットンの栽培を始めた。1000人ほどが集まって、ソーラーパネルの設置や内壁作りなどみんなで作業し、「都市農園交流拠点」にしようとしている。段々畑を山の上まで歩いていかねばならぬ立地にもかかわらず、学童も含む多くの人がやってきて有機栽培を学んでいる。コットンプロジェクトの課題だった「地域を巻き込む」ということが実現し始めている。

米綿は上を向いて咲くので一気にワースと収穫できるが、和綿は下を向いているため一気に収穫しようとするともみんな落ちてしまう。1つ1つ手作業で収穫する。非能率的だが、それが幸いして、9月から11月までいつでも綿を摘みに来れる。楽しい！と多くの人に来てくれる。

広野ワイワイプロジェクト：もとは仮設でピープルが指導・主導して細々とコットン栽培をやっていたが、今は自分たちで管理し、イオンの社員たちも手伝っている。富岡でも個人が牧草地で栽培を始めたし、双葉地区サポートセンターも町づくりとしてコットン栽培をやりたいと言っている。これが交流の元になって広がってほしい。

○「ふくしまメモリアルライトアップ つむぐ・ともす・かなでる」

3. 11（今年は10日曜日）の久之浜でのコットンで作ったランタンのライトアップイベントは今年も実行。草木染（南相馬）の手拭いやポーチ、ペンケースなどの手作り繊維小物製品も販売。以前は糸にできない短い繊維で作るコットンベイク工業製品しかできなかったのだが・・・

< 檜葉町・寶鏡寺早川篤雄住職のお話 >

檜葉町は3つの清流と山、自然の美しさに溢れた日本の原風景の町で、初めて来た2012年には見えない放射能とのミスマッチを思っ涙が出た。小高い丘の上に見えてくる美しい寶鏡寺は620年以上の歴史がある。しかし、原発事故のため寺を閉めざるを得ない。住職の早川さんは「ふるさ



とを返せ 避難者訴訟」の原告団長だ。穏やかな方だが、原発事故のことになると、強い怒りの口調で話される。

○避難者訴訟

2018.3. 22 第一次訴訟は不当判決。地裁としては最悪。早期救済のために被告を東電に絞っているのに（国に対してはいわき市の市民訴訟に委ねる）。東電の（民法 709 条の過失）責任を認めず、賠償は ADR（p.1 参照）に毛の生えたような判決。裁判官は現地に入り実態を感じているはずなのに。強制避難の 12 市町村では「強制」避難に従わなかった数名を「処罰」（刑事罰）するかどうかまで話題になった。現在、仙台高裁に控訴中で 4/19 に審査、11 月までに 5 回の公判、そして来春までに結審する予定。6 月には現地見学と専門家による意見書提出する予定。

津波予見の可否だけを問題にしているが、たまたま津波がきっかけになっただけで、いつかは必ず起こるはずのものだった。1960 年のチリ地震津波程度のもので取水できなくなった事実があるのだ。引き潮で冷却水が 30 分間取れなくなり、高波で海水取水ポンプが波をかぶり働かなくなっている。小名浜で 4m くらいの津波と記録されている。それを早川さんたちは 2 年間調べ、2005 年に東電は事実を認めた。書類がある。その後、水密性のある厚い扉にして水が入らないようにした。高さを 20 センチ（だけ！）嵩上げしたと言ったので、見せるようにいったがテロ対策だから見せないとはねのけた。町民がテロリストなのか！ 東電は我々の再三の指摘に耳を貸さなかった。今回の事故は、この体質によって起こるべくして起きたものだ！

○町はどうなるのか

ずっと裁判に関わり、団長なので弁護団と会ったりしょっちゅう東京に行ったりせねばならない。百姓サイクルの脳みそなのに、あまりに忙しくて脳みそがとてもついていけない。しかし悪は許せない！！安齋育郎さんと一緒に、寺の山の斜面の山桜・モミジのところに「原発悔恨・伝言の碑」を作り原発事故の教訓を残す。釈迦・文殊菩薩・普賢菩薩の仏像も安置。

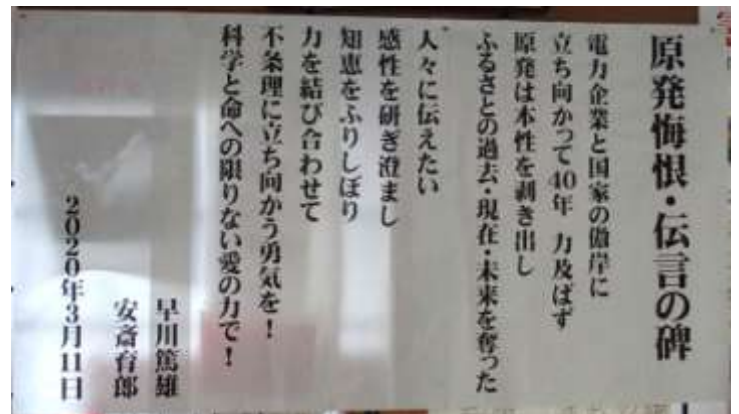
浪江の小学校は校庭が荒れ地になり、線量計をぶら下げた人形が何体か置いてある。

目につくところのフレコンバッグは撤去し中間貯蔵施設へ。新しい人が入ってきてアパートをどんどん建てている。普通に考えたらペイしないが、「復興」のための補助金が出て損をしない仕かけになっているのだ。昔の町並みは、家をどんどん解体。費用がでる内に。

一等地を潰して「コンパクトタウン」ができた。帰ってきた高齢者のためのものだ。昔とは全く違う景色にな



600 年以上続く寶鏡寺。無念の思いはいかばかりか。続けられる可能性を1ミリでも探す



子どもたちに何を託していくのか、安齋さんと考え、この詩作った。来年、碑を建てるつもりだと話す早川さん



檜葉市役所前の6号線沿いのフレコンバックの置き場に5階建てのマンションが建つ。

った。でも初めて来た人はそれを見て「わあ、ずいぶん復興してるじゃない！病院も店もある！」という。いずれは誰もいなくなるよね・・・「姥捨て山」だよ！

大熊も双葉も、町を三つに分け直して、役場を作って「新しい町」を作り始めている。

檜葉に新しいICをつくるために掘り起こしたところ、9万年前の旧石器時代の石器などが発掘された。そこにそれよりも長いこと人が住めなくなるデブリが残されたことになる。

☆役場の景色はすっかり変わった。隣接していたプレハブの便利ストア（簡単な食べ物屋台も）はなくなり、“すてき”で悲しい看板「ならば エネルギー福祉都市―自然と科学が創造する豊かな郷土」も撤去。去年は、目の前の田んぼの跡地にフレコンバッグが野積みされていたが、そこに新しいマンションができていた。



<富岡町役場・郡山将佳さんのお話>

○帰還者

震災前の人口 1万6,000人。現在住民登録が残っているのは約1万3,000人。

居住者数：2018.10月 809人、2019年4月 922人（645世帯）。その内、以前からの住人は約6割で残り4割は大部分が除染作業員、他に県事務所職員、警察、観光関係、役所支援（20～30人が福島市や友好都市や埼玉県杉戸、そして防災協定をしている品川区からの支援）など。町内居住届を出している人のみを数えているので下水などの利用状況から判断すると実際は1000人ちょっとは居るのではないかな。

○農業復興

ここの農業はやっぱり米。50代の町民が、東京農工大のIT研究室(?)とジョイントして水の管理などを避難先からもできる等の新しい農業をトライしようとしている。

○住民支援策

住んでいなくても、固定資産税を払わねばならない。今年は半額だが増えていく。家屋の解体も、昨年度までは補助が出たのでどんどん行われている。業者が間に合わず順番待ち状態。解体して、駐車場、太陽光パネルにしている人もいる。町外に避難していても、県に「もう戻れるよ」と言われてしまったら援助はできなくなる。戻った人や新しく住む人は「10年以上住む」と誓約すれば、住宅の取得かりフォームの補助が出る。元の家を評価してそれに応じて東電が助成金をだすので古い家だと少ししか出ない！



富岡町のかつての中央商店街。家屋が取り壊され、空き地となっているところが多い。開店している商店があるのかははっきりしない。



夜の森地区のメイン通り。解体が進む。帰還しない人は自主避難扱いとなり、全ての支援から外れる。取り壊し費用が3月までは無料。その後は有料の上、固定資産税が掛る。

帰ってこない人に対しての金銭的援助は東電はもうやらない。県が住宅補助をする（いつまでだろう？）。県外に住む人は、県がその自治体に頼み、両者間で話し合っって別の借り上げ住宅を紹介してもらおうとかする。（現在はあちこちの県で裁判になっている。）

☆事実上、町に戻らない人への支援策はないに等しいようだ。

○復興のタウン

郡山さんに案内していただき町の中を見て回る。

一昨年から新しく整備してきた地区が駅から北にちょっと行ったところにできていて、「災害公営住宅」として単身者用アパートと家族用の家（二戸で一棟）がある。ほかの地区と全く雰囲気が違う「新しい」町並み。観光バス・タクシー、新聞店などの店がある。

「中央商店街」は今では壊された家屋が目立つ。郡山さんも、あの辺にはおもちゃ屋、靴屋、学生服や、食堂、新聞屋があったがみんな無くなって、道を走っていてもどの角を曲がるかがわからなくなっていると話していた。福島銀行は6号線沿いに移動し、週に何回か来て開

けているという店が少しあるようだ。

常磐線はここまで来ている。いわき駅で「富岡行き」の列車を見て、大丈夫なのだろうか？とちょっと複雑な思いがした・・・

駅の東側は津波の危険があるので住めない土地として町が買い取ったそうだ。町外に住んでいる人の土地が多く、そこは①町づくりの会社に依頼 ②富岡町産業団地にして廃炉ビジネスなどに使い、雇用にもなるとのことだった。

☆富岡町はすっかり建物が壊されて、景色が全く違う。富岡2小は毎年訪れているのに周りが変わりすぎていて、すぐに見つからなかった。

大熊町に入って都路街道に入る前の35号線を走っている時、解除(4/10)直前とはいえまだ帰還困難区域なのに、窓越しの作業員がマスクのみなのにビックリ！！



駅の北側に建てられた公営住宅。駅周辺を含む地域がいわゆる復興タウン。元の住民の帰還は数%で、高齢者が多い。復興の中心は農業だが、廃炉企業等に頼らざるを得ない姿が見える。



その復興等公営住宅近くにある、(町の規模として)ばかでないショッピングモール。屋外・屋内雑貨用品、薬、食品・日用品スーパー、簡易食堂。昼間という時間帯もあるが、人はまばら。



1.200 μ Sv/h

35号線から288号線都路街道に入った直後。帰還困難区域。吹雪始める。



288号線を西に走り帰還困難区域を抜けて399号線に合流。田村市古道地区。



1.622 μ Sv/h

399号線で葛尾村を抜け、再び帰還困難区域に入り114号線に合流。浪江町津島より南東を望む。

<大塚さんに再会！>

飯坂温泉から 399 号線を少し走った福島市内の桃りんご農家の大塚さんご夫妻と再会。2014 年に、畑にいらっしゃるところをお話を伺ったのがご縁で、何度かお会いしているが、去年は最高に美味しい桃とリンゴを送っていただき、今年は前もって連絡。どうしてもということで家の炬燵にお邪魔した。「桃の値段は下がったまま今でも戻らない。土の表面(一番よいところ)を剥がすことはしなくて済んだが、上にカリウムをかけてセシウム(カリウムと同じ種類で放射能を含む)を吸い込まないようにしていた。来年からは、やらなくてよくなる」とのお話。こういう素敵なつながりができることに感謝。



大塚夫妻と玄関前で

<飯舘村>

展望広場に行く帰還困難区域へのゲートに立つ監視員はいわき市の若い人で、原町から通っている。始めのころからやっているとのこと。「年間 50 (mSv) いてないから平気かな」と少し不安そうに話した。以前、監視員の方が「孫が抱けなくなっちゃってね」と淋しそうに言っていたのを思い出した。

村役場に隣接の老人ホームは、震災後も一度も閉鎖せずに続けている。現在 38 人。新しい入居者は 10 人程度。戻ってきて住んでいる人もいる。福島市からが多い。スタッフは 50 人くらい。



福島市399号線から見る吾妻子富士

<飯舘村役場 三瓶さんのお話>

去年、一時間半近く話を聞かせてくださった三瓶さんは、4 月から教育委員会へ異動されたのだが、今年も話を聞かせてくださった。

○帰還状況と家屋の解体

震災前の人口は 6,000 人。2019. 4 月現在で 1,034 人(旧村民 943 人)。60 歳以上が 75.2% で元気な人が多く、車で移動でき、生活のインフラに関して支障はないと判断している。

住民懇談会での要望：商業施設については、道の駅とコンビニが一つしかないの店などがもっと欲しい。郵便ポストも 5 か所のみ(広い土地に！)なのでもっと欲しい。今は車の運転ができる人ばかりだからとりあえず大丈夫だが、介護福祉的に支援が必要な人に対するケアは現在は無理なので帰りたい人も帰れない。

先月(3 月)末で仮設住宅が閉鎖されたので今後のことに関して決意しなければならなくなった。住めない家は解体。古い家に対しては補償金が少ない。家をリフォームして 100 戸くらい村営住宅



飯舘村入口のシンボルタワー。年々、みすぼらしくなる。奥の家は事故前に新築されていた。その裏にある古い家は今回解体されていた。

を作っている。仮設の資材を使った村営住宅を 20 軒（四戸で一棟のものを 5 つ）作る予定。十数軒希望があったが減るかも。震災前は家は 1,700 軒あり、それぞれの家が 2～3 棟持っていた。雨漏り・猪・ネズミ・獣害などでダメになったり、「解体費用と固定資産税」発生の前にと解体が進んでいる。アンケートでは 3 割が戻りたいと言っている（☆単なる願望も含むのか？）

○農業の復興

元からあるファームで作っている作物は放射能をほとんど検出せず。県が二か所から採ったものを三回検査して基準値以下なら出荷できる。夏からインゲンも出荷する。市場に出せるほどの収穫量はないが道の駅ではカボチャ・大根・白菜・ジャガイモなども販売。再開農家は 20 世帯と一組織（復興組合のようなもの）が米を作り、「里山のつぶ」という名で JA に出荷。蕎麦(12.9ha)や野菜（32 世帯）、ブルーベリー(1 世帯)、キンカン(2 世帯)も少しずつ。花はハウス・路地共に増えている。元々あったトルコキキョウ・カスミソウ（寒冷地なので色が綺麗で長持ち）などのべ 20 世帯。肉牛は 265 頭 9 世帯。乳牛も 2 か所で始めていて外部からも一人参入。

炭焼きは木を切ったり草を焼いたりできないためやることができない。ため池の除染はやり始めた。

フレコンバックはかなり減っている。2021 年中には中間貯蔵施設へすっきり運び去ると国は言っている（本当か？）里山の除染は目処無し。国の直轄から環境庁になったが、直接村が金をもらって自分たちでやる形にしたい！（大企業の下請けではなく村がやれば、雇用にもなるし、土地を知る自分たちで心を込めてやりたいと去年も話されていたのを思い出した。）帰還困難区域の長泥の除染スタート。そこに建設された仮設焼却炉は



今年教育委員会に異動になった三瓶さんだが対応していただいた。解体費用が打ち切られること、固定資産税が4月から発生することなどで、家屋の解体が進んでいると、淡々と話す。帰還者の75%が65歳以上、元気なので問題無い、という。



新田川沿いの臼石小学校。もちろん、使用されていない。いまは小・中生一緒に役場近くの学校に79人(2018)が通う。そこは認定子ども園もある。ほとんどが避難先から。



ひもろぎの里風景。フレコンバックは12号線、町役場界隈から片付けられているが、ここは最後まで残りそう。広大な田んぼの再開のめどは立たない。



7年ぶりに見る展望広場からの風景。手前に帰還困難区域用にゲートはあるが、今年はかなり緩くなっていることができた。

2020 年末までの稼働予定で、灰は中間貯蔵施設にもっていく。

外部からの反応：商店が遅れてるので、スーパーを作りたい、新しい産業を興したい、刃物職人からの問い合わせ等々あるが簡単ではない。ブロッコリ栽培(ハウス&路地)、わさび工場などの話もあるが…。

○学校の再開

2 年目になる。0 歳児～中学生まで 100 人程度。8 割が村外から通ってきている。20 世帯が村内から通っている。食べ物は川俣町から移動販売が来ている。

○今後

復興のハード面は終わり、ソフト面で未来計画をしっかりと作り、ビジョンをしっかりとって、基盤プロジェクトを作らねばならない。(☆それが大変だという感触を持った)

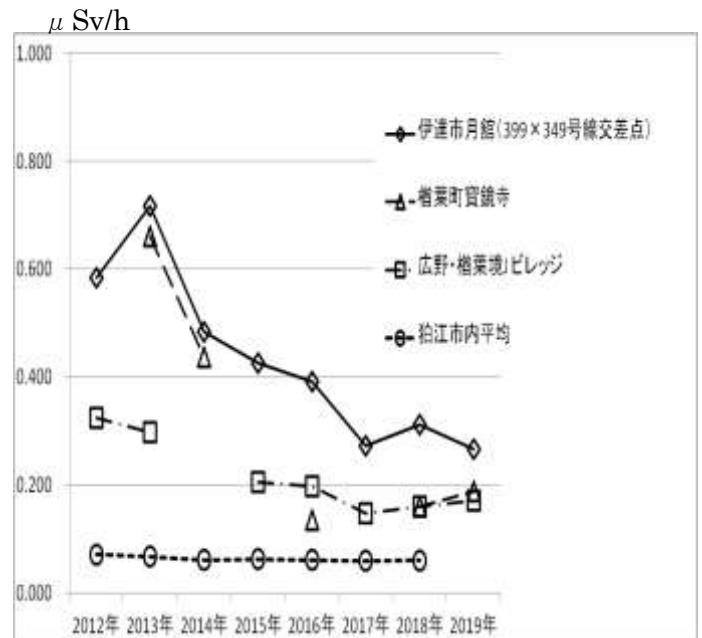
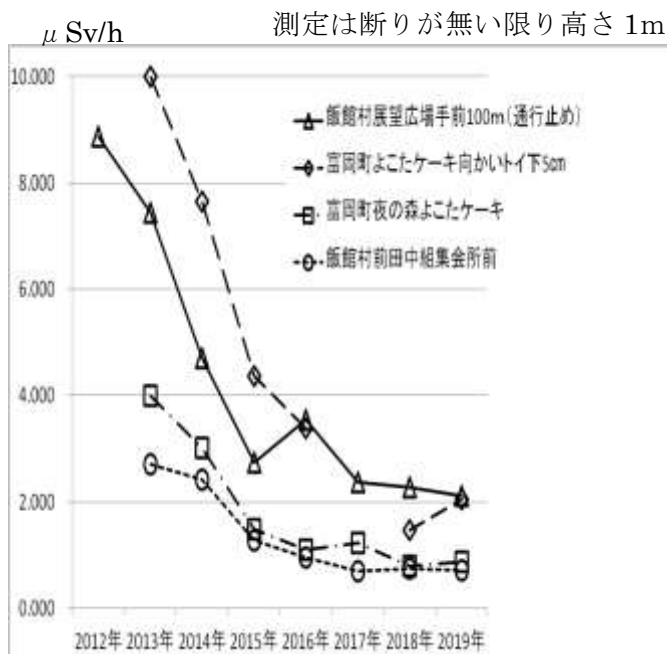
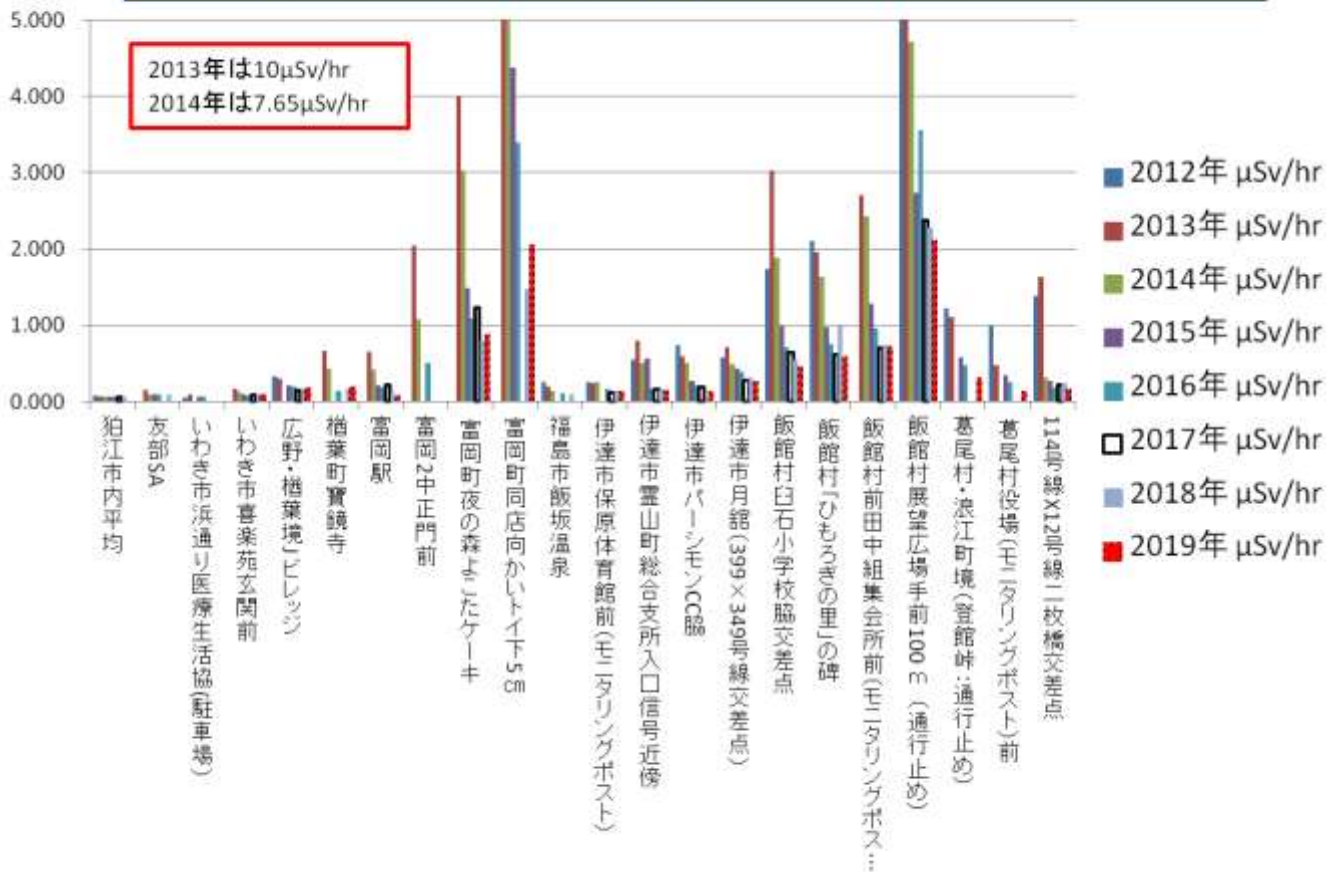
<終わりに>

去年はあまりのフレコンバッグの数に唖然としたが、一年たって目につくところの袋の山は減ってきたように感じた。そして帰還！「復興」へ向かっての準備が「進んで」いるかのように見える。だが、あの袋たちはどこに行ってどうなるのか・・・？「復興」とは何なのか？飯舘・富岡、二つの役所で話を聴かせていただいたが、辛い時間でもあった。飯舘村の三瓶さんの「しっかりビジョンを持って」という言葉。そして富岡町で託されたアンケートの中にあった「復興とは何だと思いますか」(正確な表現は忘れた)という問。国の支援の非情さと東電の無責任な態度の中で彼らが苦闘していることが強く感じられ、「当事者」でない私たち国民の無関心さの罪を思った。

J ビレッジを再び訪れた。震災一年目に行って、「この先、放射線管理区域」で入れないところの物々しさを初めて感じたところだ。原発関連の作業をする企業の拠点となっていたビレッジに早川住職の車で入っていくと、ただロータリーをぐるっとただけだが、ピリピリした雰囲気ですぐに女性の守衛(?)に怒鳴られたのが昨日のようだ。今はオリンピックの聖火ランナーの出発地としてすっかり変身している。来年のオリンピックでは、「福島は『復興』しました！」の象徴となるのだろう。グラウンドでは多くの若者がサッカーをしていた。合宿で東京から来ているという高校生が気さくに話をしてくれたが、私たちが線量を測っているというと「ここは大丈夫ですか？来る時放射能がちょっと怖かったです」と言っていた。

去年とは打って変わって寒かった今年の私たちの福島の旅、山の中で枯れ木に咲く美しい雪を見ながら、早川さんの「姥捨て山だよ！」との言葉が心の中で響いていた。

福島放射能線量調査結果(2012～2019) 単位($\mu\text{Sv/hr}$)



特定地点の経年変化

狛江の放射能を測る会(<http://hakarukai.clean.to/>)

連絡先: 西尾真人 ☎03-3480-7477